



陶犬新書

上

1冊5
431
1



開曾5
辨 431
卷 1-3



婦 祿を流るるにそよみありまほ
の 懐にふふあり具すはまに
とくをれるとあひの庵はむす
朝あひ常流に釣はきれ
北漢に細は飛く月を
とくをれるとあひの庵はむす

あはれあここの庵にかへり何し祈り
くちを流れば高れは軒の松
うせに通れば燈をけり婦の
をて何うのれはまに友り来る
世の人に満ちる福の法をれき
はるをちすつれのおくと思

事のみは秋海に書はけり
浦元の夜は守りおき
あく瓦の鶏是れつるはとる
無しといふ古ことたに遠く
婦の良きいれり人の為
いのたはるぬぐい

それはおれ——いんたんと
名はけぬ

天保卯の——のすけ
徳川亭に筆——

おぼ家の子延

陶文新著巻之一

目録

- 酒を人にすむる詞 ○ 八文字をがし其後の作
- 寸法けんのゑんいゑ味 ○ けい店 ○ 肝をい
- 枕駢 ○ 全唐詩逸翻刻 ○ 阿のいからす
- 飯の焦い好む ○ 三重の酒 ○ 市座遊
- 北のこ ○ うらまきの假面 ○ まろこ
- 雲山いえ歌 ○ 藝子の稱遊里の時変 ○
- その夜のほらまき ○ まろこ人の憶談理あ歌

何とぞ○水引の幸○へぎもち○才とよみ文字
○ことよみ文字の幸やう○年忌法事七
日○又されぬ屏風○うりやうとせき世○夜
軍の繪と刷立やう

陶大新著卷之一

浪速 中洲漁史 護撰

酒故人にすむる詞

むろゝの酒故人にすむる幸。程よく詞故侍くし。
人の呑むやうの心くわゆる。唯むら強に酒故侍く
む故ゆへ其害おほくし。身故うこそある幸。幸と
るえん。数百年おほいごから故る外し。多活寛
又のいふゆへ。そのまに心と老と故詞の世の中ふ。
いひ廣うまことある。上戸の身にとやう。何んが故の

禁經案。を三味線。信交紙子。名高き自笑が
 作ありと。世の人おそへど。正徳四年午正月の年報。
 役者目利講。といふ役者評判記に。お題、都の花
 生け。燕に身取掛けしれぬ形。といふ詞書ありん。
 ちし。兄弟評ハ。口上役松川。右左衛門。故上。吉と志道。
 今都にて口上いひぬ。年山。口跡。よく通る祿ありし。
 あやよくきこへ。役人。勢名。のいひた。法女。げきれく。
 何れをれ。年。大板。中比。役目。を名と。水嶋。角平。宇鷹。元海。店。又の

むじ。小柳。武彦。後。天竺。と。名字。故。移。り。け。人。こ
 め。を。海。け。ぬ。口。上。の。御。人。法。の。を。を。う。た。の。を。海。け。て
 各。一。通。り。改。成。し。え。ら。む。き。す。東。海。く
 さ。て。け。し。御。こと。を。改。し。海。す。ハ。役。者。評。判。記。
 中。比。が。水。通。い。づ。ち。ハ。奮。と。り。草。子。や。板。け。り。し。と。す。こ
 古。板。は。書。加。へ。て。或。ハ。役。者。評。判。記。又。板。檜。を。ど。し
 外。題。改。成。し。か。し。不。み。以。役。者。目。利。講。の。作。者
 其。續。と。す。き。ま。り。三。津。城。三。卷。に。け。け。ひと。切
 法。の。原。紙。つ。け。御。慰。に。上。す。又。ハ。白。字。の。上。を。ど。し

作者身に任かた心弁の至りに存候。抑ハ文
字屋ハ奮つと申し紙屋ハ。何ぞとて世目一廣く名
成獲しと也。二条正中や。日齋屋ハ。吉原より海
阪堺中へ名成取。ハ文字屋ハ。東芝屋の如き
本城板切仕仕弁。法の多象名成世目。に。海存知
るんを。あはれさく。然る處は。作者其稜。板切
治太又方一上有り。故作也。其語は。中城
ハ文字屋へ也。板切。させしとあり。年々の
評判。中城におよぶ。けし世目。三味線。又ハ

曲三味線。禁短氣。傳交紙子。乞情あいに
此形。即伽魯我類のさくは。その著。数年
頃。作也。巻し。世に。各々。横の。海さ。に。以。て
ハ文字屋。と。是より。浮世中。評判。中城の。各取
の。如。に。存。中。あり。の。事。ハ。文字。屋。の。切。を。し。也。
作者。其。稜。の。切。を。し。也。け。し。世。目。か。り。せ。ら。せ。
上。の。人。さ。あ。即。ち。管。教。の。下。に。結。文。作者。の。実
名。成。の。事。す。作者。ハ。文字。屋。自。突。と。致。させ
お。し。世。目。け。し。の。海。切。成。之。事。す。今。も。ハ。ハ。文

いふりて居ひ夫等き申へ。乾くみせといふをるへと。
おえひしに。寶聯録に。肆有_下以_上篋以_上篋。
或倚。或垂。鱗_ニ其物_一鬻_上者。曰_ニ星火_一鋪。と
あり。古きいなり名_レ傳_レけしに。何_レ下。青義の
おのほろの通る事あり。干店_{干店}乾鋪_{乾鋪}よりい。
星鋪_{星鋪}のく面白く賞_レ申

肝_肝考_考ハ_ハ杞_杞驗_驗

自_自笑_笑が_が樂_樂の_の託_託に。年_年公_公人_人き_きえい_{えい}と_と杞_杞驗_驗と
いふ。は_はい_いは_はき_きて_てる_るなりと_とえ。分_分一_一故_故志_志や_や乾_乾驗_驗故

え_えこ_こが_が乾_乾て_て大_大と_とあ_あや。東_東都_都より_{より}肝_肝考_考故_故。今_今
毛_毛於_於せ_せら_らん_んと_とい_いふ。

全_全唐_唐詩_詩逸_逸翻_翻刻_刻

知_知不_不呈_呈齋_齋着_着書_書ハ。流_流布_布本_本廿_廿八_八帙_帙あり_りしに。
近_近身_身三_三十_十帙_帙ハ_ハ全_全部_部と_とせ_せし_し本_本第_第一_一帙_帙ハ_ハ元_元
未_未ど_ど多_多か_から_ら礼_礼也_也。目_目録_録と_と翻_翻刻_刻全_全唐_唐詩_詩逸_逸の_の
跋_跋ハ_ハ抄_抄す。

知_知不_不呈_呈齋_齋第_第二_二十_十九_九集

梧_梧溪_溪集_集 七_七 卷

困學齋雜記 一卷

曰三十集

尊德性齋集 三卷

塵史 三卷

全唐詩選 三卷

中吳紀年 六卷

廣釋名 二卷

西孝子壽親記 一卷

畫梅題記 一卷

全唐詩選跋

全唐詩選三冊。日本國河世寧所輯。余得之海濱船中。以贈鮑滌飲先生。有知不足齋叢書之刻。故以此冊附入焉。未付梓。歸道山。今長君清溪能成父志。屬余校讐。余惟日本玄中。華。僅三十六更。其得被_レ_レ朝文。余之數者久。故其人皆耽著述。就余所見。如_レ山井神昇之七經孟子考文。其師物

或卿之補遺。或卿自著有辨名二卷。
 誦信徵十卷。林羅山有補羣芳治要
 三卷。天瀑山人校刊佚存叢書五集。
 頗閱博而有考據。其詩集則然返邦子
 其子然返秀之南遊。網載錄。或亥遊
 素西川。瑚之蓬蒿詩集。皆有斐然可
 觀之處。茲又得以此三冊。則日本之文學。
 固非海邦他邦所可並也。夫全唐詩集。
 至數萬篇。必乎時盡熟於胸中。而然後

博覽羣芳。方知其人。某篇某句。為搜羅
 未盡者。乃摘錄而纂成之。以宜易事哉。
 然則。河世寧之好學深思。從可知矣。余
 亦撰吾妻鏡補一書。凡日本著述多所
 采錄。是書亦曾采入藝文志。且華清
 溪之能成父志。使吾黨得見所未見
 之書。誠大快事也。遂識數語於其
 後。

道光三年癸未立夏後十日 吳江翁廣平海探氏跋

この金唐は逸い。上毛何世寧ガ纂ガ緝。男三亥ガ
按。後海竺三輩の席ある。よのく知れと
こちされバツとず。かち幸の謀に。

昇平の英幸トりつべきのちり。

何のあわらす

續ガみはきの唄舞のお端に。意欲するみら
るの子鳥。夜毎くた。啼あらず。シヨガアモ。歌のま
身ガ。何のぞのからず。日々くた。さきとく。

シヨガアモ。又浪達の女子七月十五日より。八月朔ガ志。

おんぶくとおぐけ。二十人又三五十人連くと馬ガ
唱教ガ。さひはしゆくさめ。其唱教のうらに。
からガ。免ガ。ナリ。ナクヤからガ。免ガ。ナハヨイヨイ。あ
わげからガ。あが。勢所くうせく。かガ。をガ。持ガ。さガ。に。
かガ。くガ。とガ。くガ。あ。勢所くうせく。何はガ。をガ。さガ。りガ。
とガ。あガ。れガ。バガ。れガ。にガ。けガ。くガ。何ガ。づガ。からガ。すガ。りガ。えガ。
つらガ。づガ。からガ。すガ。りガ。あガ。幸ガ。のガ。十ガ。五ガ。経ガ。にガ。我ガ。洪ガ。舊ガ
里ガ。化ガ。成ガ。鵲ガ。鶴ガ。示ガ。怪ガ。語ガ。鳴ガ。別ガ。都ガ。頓ガ。空ガ
壽ガ。我ガ。洪ガ。舊ガ。里ガ。化ガ。成ガ。鳥ガ。鳥ガ。示ガ。怪ガ。語ガ。鳴ガ

阿和薩加アワサカとよふらの十王經ハ偽經のよし
何ぞ僧のつひ一奉ゆれど古き考を考
あふとろゆれバサアアア。ここに替す。

飯の焦好む

明の鍋巴老人アハノカの著九烟とよふ人をもよふことむと
鑄の底の焦飯食ふ。時人これに嘆きし。
鍋巴老人とす。當時賞譽の詩あり。高山
流水詩千軸。明月清風酒一船。借問
阿誰堪作伴。英雄才子與神仙。

三重のゆけ

享長二年版本。これゆけのり州紙に三巻
酒とらふる毛あり。酒は飯一りのきの平下紙
更とめて。これ城三友せん。たふ飯り。

以彦むくえ

世俗に藝を織りて藝城むくえのむ。藝を
織りて故市を織りてむくえの南より織りて
むくえのひきまけ。東山夜よめ入の註にむく
の事二海りて藝へ。藝をむくえ。又おもむ

竹

軍法家士は西行はり小おのまをの
 何や故をす 國升とあり 美くま飯
 お目仁くまよがや三跡存野よか
 老若せし不食くと任あねま
 奇とせやあめ竹の所作おまの
 老の郡やヤヤちよ件と
 こらで天のうま
 せき 神代
 ころがまの
 を甲のまがた
 けのぬの
 ほんのぬ
 ほんのぬ
 めれいとうまはは 神代まがた
 竹のサシヤ



田田

存子は夜中のまはり
 られ高くは伊さ
 ざめとまもや存子権
 あんとんせんせま
 かう取ま
 かうのま
 ねくま
 アイナア
 かう
 かう
 かう
 木に
 存子のま
 志や
 木
 木
 木



宿。絕頂光相奪。于時早秋。曉起。遠望。雲
寒。冽。不。減。嚴。凍。為。體。戰。齒。闕。不。能。止。
時。奪。鷄。三。號。身。殊。月。猶。在。遠。見。西。極
荒。雲。有。一。點。尖。明。若。火。光。者。因。以。問
僧。云。以。天。竺。雪。山。為。初。日。所。照。也。始
亦。未。信。以。之。日。出。而。以。山。隱。之。煖。耀。天。際。
已。而。日。色。滿。大千。則。山。光。不。復。明。矣。但
見。一。彩。堆。身。余。味。以。言。乃。知。佛。經。言。初。日
始。出。先。照。金。剛。山。頂。為。是。證。也。之。九。胡。意。

驛。甲。乙。刺。言。江。口。之。云。又。沈。景。倩
少。歷。蜀。獲。編。江。今。域。中。所。稱。雪。山
禪。家。葱。嶺。釋。迦。佛。修。道。蘆。芽。穿。膝
處。近。日。游。我。眉。諸。君。盛。誇。絕。頂。之。勝。云。
日。半。夜。即。出。照。雪。山。之。巔。相。去。數。里。
如。對。面。王。恒。叔。士。性。有。記。而。胡。允。瑞。又
嘆。異。之。引。佛。經。日。照。金。剛。山。為。證。而。其
實。不。然。按。今。大。雪。山。在。印。部。長。官。司
西。五。十。里。雲。曲。時。不。消。維。州。在。志。云。

白豹嶺與大雪山相連。維州即今茂州。
 而松潘衛之雲梯寨。即古鹽川慶縣。
 有寶頂山。其山曲時積雪。又天全招討
 司東南白崖山。矗立如雪。近白崖又有玉
 壘積雪。土人以玉堡呼之。可見峨眉左
 右為雪山者甚多。王恒叔諸公所見
 者是也。若西域之雪山。決非目力所及。
 此可以理斷者。張舜民畫幔錄云。自
 岷州趨宕州。至臨江寨。上天山西望雪

山。日見如銀。其高出衆山上。若人曰以佛國
 雪山也。有獅子。人常見之。此非西望雪山。
 乃無憂城雪山耳。據此說。則又從河西
 泚岷而望西蜀。其誤不始於今日矣。又
 耳肅行都司所屬永昌衛。亦有雪山。頃
 冬夏積雪。望之皚然。寒氣異於他處。
 鳥飛不下。無涼州相近。又臨泚府之河州。
 亦有雪山。接吐蕃境。蓋即永昌之山
 而望見之。隨大業初。吐蕃渾敗南

奔^ル雲山是也。又雲南麗江府西二十里。
有^二玉龜山亦名雲山。山巔雲從^レ夏不
消。玉立^二華佗^一千里望之若^二咫尺^一無^レ蜀。
柘州諸山相接。南詔畧年專^レ僭位。
封^二為^レ北蒼山亦名雲山。といふ^一甲^一の
善^レ哉^レ委^レ信^レた^レが^レぞ。といふ^一甲^一の
や^レに^レ免^レ申。於^レ唐^レ人の憶^レ設^レ切^レり^一ある^一裏^一。
と^レす^一。

藝子の梅遊里の時渡

後者は三味線といふ善に。法師阿^レ曰^レ吾^レ役者
種^一といふ一通^一とあるやうにやが。は^レど^レ免^レし^一や^一の
免^レの子^一を^レう^レれ^一た^レは^レわ^レう。大^レ後^レ卷^レて曰^レは^レ此^レの^一お^レわ
た^レは^レ女^一に。親^レえ^レい^レや^レし^一き^一む^レら^レに^一何^レぞ^一。お
え^レう^レち^一から^レせ^一。清^レ人の。あ^レれ^レは^レ所^レ人の^一う^レと^一く^一人。
け^レめ^レの^一亦^レ道^レに^一流^レら^レい^レる^一て。た^レは^レお^レむ^レさ^レれ^一く^一身。
は^レす^レは^レる^一敷^一い^レあ^レく^一て。一^レ子^一は^レ子^一供^一座^一へ^一お^レく^一る^一は^レり。
又^レい^レは^レら^レ女^一わ^レて^一い^レれ^一。子^一の^一や^レら^レと^一い^レく^一て。親^一
と^レす^一の子^一を^レ有^レと^一り^一あ^レ。これ^レは^レ葉^一が^レ終^一に^一藝^一子^一と

河にす。役者に三味徳。又禁短糸といふ事紙に。
 寛永正徳年間作す。又軍法富士見西
 行。延享五年あり。丹次爺折栗ハ。寛保
 三年あり。延享に十年まで。寛延元年。居の
 八月十四日の夕方の活板理中。假在子本志信
 苑に。ひるがや。娘や藝子に。いれ精あも。う
 清めし。と有又昭和七年。年板の。孝行娘
 袖日誌に。おまはし。に。と。藝子の。す。高心
 分。数。十。人。呼。に。さ。ら。せ。と。あ。る。こ。れ。ら。の。話。は

毛流て考ふるに。寛曆明和のころより藝子
 としよそのおまはし。と。あ。る。今。八。卦。包。八。卦。を。た
 藝子の。と。ま。り。と。か。す。唯。隨。承。さ。ん。の。金。魚。燈
 こんじ。と。さ。ん。の。露。油。の。け。ん。と。雙。昌。の。入。か。さ。り。し。る。は
 著。つ。ら。子。の。お。ま。は。し。と。ま。り。と。か。す。唯。隨。承。さ。ん。の。金。魚。燈
 南。城。の。お。ま。は。し。と。ま。り。と。か。す。唯。隨。承。さ。ん。の。金。魚。燈
 が。作。の。お。ま。は。し。と。ま。り。と。か。す。唯。隨。承。さ。ん。の。金。魚。燈
 この。花。を。も。秋。文。と。ま。り。と。か。す。唯。隨。承。さ。ん。の。金。魚。燈
 長。所。う。ら。い。の。お。ま。は。し。と。ま。り。と。か。す。唯。隨。承。さ。ん。の。金。魚。燈

そこの夜のほろこき

皇朝元ハ。ほろこぎ出城。夏の部にこれ。四月の
末に帝城ほろこぎにほろこぎの部にこれ。五月の
三月に帝城。帝のよきこと。これ。これ。これ。
宋の范菊蘇が燕山鶴城を待たに。燕山三
月初三夜。独得。帝。鶴。第一。年。日
是。小。楊。孤。獨。下。主人。勝。熱。客。心。驚。
と。何。を。三。は。三。は。い。と。ま。や。く。心。み。く。ま。こ。け。と。ま。や。
さ。ら。び。や

そこの人の憶説理の如き

知不臣。齋初。快件の。新。彫。古。文。孝。經。
序に。太。宰。純。の。宰。城。り。其。の。國。太。宰。府。遣。
人。真。方。物。或。收。得。其。煤。今。序。刻。是。善。
之。太。宰。純。未。詳。為。何。如。人。日。本。多。世。職。
太。宰。純。豈。猶。其。苗。裔。或。以。官。為。氏。
者。乎。惜。來。十。萬。里。之。波。濤。難。盡。不。
易。向。身。と。し。太。宰。府。或。官。名。と。思。ひ。誤。也。
一。也。又。智。囊。補。に。北。方。馬。生。駟。教。

日則整鬃馬于山半。駒在下盤旋
 母子哀鳴相應。力掙而上。乃得乳
 漸移擊高處。駒亦漸登。故能跋峻
 如砥。今養馬宜就高山所在放牧
 亦做其法。馬自可用。又倭國每生
 兒。親朋敘鐵相賀。即投于井中。歲
 取緞練一度。長成刀利不可當。今
 勲衛之家。世武為業。而家無鐵
 又愚意亦宜做此。と云云

説以高とおまじと云云。類函に唐原が
 日本刀歌に有る贈我刀并刀。與鉄復作
 靱青絲綆。重々碧海浮渡素。身上電
 文雜藻荇。悵然提刀起西顧。白日高
 高天周々。无髮凜冽生。鶴皮坐失炎
 蕪。日方永。年説倭人初鑄成。歲歲
 埋藏擲深井。日淘月煉火氣盡。一
 片凝冰剛清冷。持以月中斫桂樹
 顧兔悲知避。光景と有深に鐵以井

片と掛け入れ玉。手と返中しく、燦たる。利刀故
うらやみにしと思ふ。理の如くは、其の門の種、居が刻する
鈍刀のこさるばが、おもしろや。其門の種、居が刻する
石抄に、日中の太刀の圖を、画き、上にて、歐陽永
叔、日中刀の詩、以、録す。世人、識る、と、あるれば、
驚き、せす。又、徐氏、筆、精に、嘉靖、中、有、軟
倭刀。長七尺、出、鞘、地上、卷、之。詰、曲、如、盤
蛇。舒、之、則、勁、自、若。と、い、い、る、古、刀、故、抄
か、し、や。お、け、つ、ら、れ、し。又、張、五、法、秘、藏、に

近時、莫、倭、刀、劍、亦、後、所、見。約、十、餘
口、雖、大、小、不、同。俱、有、一、道、法、光。射、入、則
致、納、遇、之、矣。不、立、死、者。と、い、い、る、これ、の、実、事、也
又、と、い、ふ、古、刀、故、抄、に、事、氏、因、こ
る、事、す、の、事、

水引の事

三光院内、府の部に、禁、中、多、く、事、多、く、こ、の、故
用、む、ら、れ、れ、也。但、密、紙、短、冊、也。白、紙、の、水、引、紙
也。一、寸、と、い、は、れ、れ、也。む、す、び、け、が、し、の、警、察、の、水、引、固

前には當時の水引。後には水引ハ一向不用之也。半白
半紅を紙水引紙。白紅と号して。弁標に用之
り。或はむすびやうの奉ハ。中にみえき用あるもの
序盤あり。細にひきえせはきまの。まらむま
あり。阿豆が流らぬ水引の。三巻。まらむま
つゝ人の説に水引ハ紙捻に。糊水紙ひくゆた
水引と号す。又後水尾院手付り月仁。何れ
あるもの故紙。紙を繕じ。或ハ紙をとおほして。上紙
繕ふやうの時。水引紙用はず。無ぶく。水引紙ハ

後き道具のうちにいれず。とある。又ある人の説ニ
水引のむすびやう紙。繕むはるべきに。白紙をいへ。
紅紙をいへ。白紙をいへ。白ハ五巻のものとあり。たハ陽貴き
とある。白紙をいへ。又ある人の説。後ハ
雍州府志紙引て。奥に水引の名あり。或ハ
吉事の時ハ用ひ。不吉の時ハ不用。いハ説ある。
用ひにたらす。雍州府志にハ。漫。其水紙
起之ハ白巾。紋引之故に。水引と之ハ奥の名と
おほきまらむ。考ふところあり。やうす。

事おろし。孝多し。又佛者信不儒
道。故月也。故事ハ。東見。能に佛者年忘
の事。不事。一切経のうちに。これハ。女
納言。信西。十三年。忘故。櫻町中納言。是
故。修せん。と欲し。其弟。僧高野明遍。
これ故。同せ。其兩人ハ。信西の子。其佛
者ハ。四十九り。やむ。其後ハ。儒者の系
法。假法。年忘。し。其事故。も。む。し。子。
系相。玉寺。瑞溪。一切経。故。考。し。し。こ。ハ。

經のうちに。忘手。胎記の事。昔。て。る。故。に
佛者。儒道。故。假法。し。これ。故。用。ゆ。し。む。り。と
し。て。と。れ。と。五。四十九り。故。佛者の法。し。し。を。あ
らず。陰餘。叢考。に。七。之。祭。實。不。始。於。唐。
按。北史。胡國珍。死。魏明帝。為。舉。哀。詔。
自。始。薨。至。七。之。皆。為。設。于。僧。齋。今。七
人。出家。南人。孟。宗。死。靈。入。后。於。其。七
日。設。二。百。僧。齋。北。齋。武。成。帝。寵。和
士。開。將。幸。晉。陽。而。士。開。丹。死。帝。聽。

其過七日後續發。又孫靈暉為南陽
 王綽師。綽死每至七日。靈暉為請僧
 設齋。以則倣七之明證。蓋起於元魏北
 齋也。檢之魏時。道士冠謙之教盛行。
 而道家練丹拜斗。率以七之四十九
 日為斷。遂推其法於送終。而有坎
 七之制耳。此其併者流之法也。又
 道家之法亦有坎七之制。又七日之數
 曰善。喜雨。逸。音。引。人。之。初。生。以。七。日。

為臘。死以七日為忌。一臘而一鬼成。一忌而
 一鬼散。上之七之謬。推之。其葬
 也。奇多。其車也。北史林箴傳。其也。
 王死七日而葬。有官者三日。庶人一日。皆以
 盛屍。設舞。導從。典。至水次。積薪。焚
 之。其餘骨。王則納金罍中。沈之於海。
 有官者以銅罍。沈之於海。庶人以瓦送
 之。江。男女皆截髮。隨葬。至水次。哭
 哀而止。婦不哭。每七日燃香。散花。復

物だ。らろざすまに。美事故西をうらむ。家
 業におこさる衣服調なまげに。心故月ゆけ
 粹とおまじ遠くを当世に女織にふあは人
 ナムといふこと故等祢一條に。傳の粹とよ
 里このあまのされば。我を知らずと。野風とよ粹
 蒼く—とりみ見え粹と。放蕩家と混雜せ
 ぬ事あき—このあり傳の粹に艶。逆通徳
 りふぶと—旅づ—徳く—始末を—
 是ふぶ—この心故もち—家業にむさ

らず。陶象の富びを—先祖の名故揚げ世よ
 融通故さ—。憐息故が一—押を
 ち—さす家うら潤ふこ下。粹なる故。海の岸
 面におくぬすれ故粹とおりの何れ。すまたれ
 心配故。粹とおまよ有。これに粹とよまの何れ
 このやれ心振ひすれ。列—れと業す。藝
 子幸—受これちりはれ。我業故つとをてま
 りに業いすせんえち故粹とよ。まけ舞閑
 樂日誌に。諸由のたいこ持の先ハ夕那くそ

一之可二
常。中居のかえと之類下世にたのこて。この幅の
いろき故うこて。まき程にうけを故うこて
新みに。ちこつにほまきまねむ。むうの若衆
あまて。取付くよみてくたに。紙短十四五枚あ
りて。宛名は皆清々毎まると有てうらま
遠して。花鳥小太夫。羽石卯の葉うまひ
花前。千菊も長谷。あまて。こた。まひ山
小倉。お好みや。花く。室の若衆が
とあり。こた。常の。人の紙さる紙見さし

まこ花見遊山に。暮伊候うら。るも今に古
風とまらぬ。むう。幕のかまに。新のふ神
さ。て。小社幕とせ。古き。画をまら
る。ま。は。ま。に。海系。静に。夕日。紅む。の。神
あ。う。ひ。お。の。花。見。衣。毛。ま。山。吹。の。あ。ん。ま。お。ま
え。す。是。を。新。小。社。幕。の。う。ら。ゆ。ら。ぬ。と。あり
然。と。伊。守。ふ。神。を。晴。れ。か。け。さ。ら。ぬ。又。丹
前。と。い。ふ。こ。と。何。う。丹。波。の。守。の。門。前。に。伊。守
せ。し。ぬ。お。ま。ら。ぬ。ぬ。紙。は。し。ぬ。お。ま。ら。ぬ。と。あり

りか説あれど。未だ證據未だ乏し。けり詞
東都のこゝと思ひしに。むうら上方とせしむ
し詞や。正徳六年西沃一風が作。今原
氏うけげあしとよし紙に。南地の芝居
村のハ樂昌。ことに古今新なる座より
江戸堂と生嶋新五郎。又卯の座より
中村七三郎とんとん。今横舟前ハ何れ
役者。とらむおし。是等の詞とゆ。又甘の田
葉紙とのむる紙。娘容姿にむしり

ゆのたむと吞むこと。遊女より外ハ。怪我もそ
るし。るをるに。今たむこのまむ甘と。精進紙
すれお家いすれあしとよし。又俗語にるすそ
し。たあく。しげらある女はし。とすをれを
り。あし詞をれ。と原氏うけげあしに。何れまの
間男とをすするが。時にとすをる人ハ。勤先女
口前と。とら又娘容姿に蓮葉女とよし。
つらなむとけれ。と時のがらとらおれをるし。
よのここの風俗はるる。原氏うけげあし。

南流の柏嶋田。針子入のち子元ゆい。かゝら
 うら帯の仕かゝに形也。光琳をやらに。正統しん。
 経のかくうらけのうに。十三かをもよませ嶋帯也。
 かまんぬむすむを。やきや。や浅く。あか
 帯。くれをあのうと申ぐ。と有又寛保二年
 為永太命書。百合雅高藤軍誌に。立
 帰。款何る。の葉次。日々流の勿研風ぬき。
 おし留の綿子。結末。そびちるあんのちお織。
 とし文句。か契玉藤原合戦。元。はやく。ぬる又

有あを。又寛延ころの世。月毎就容。氣に。南世風の
 ちぬひの小袷。白綾の何をもよに。うらけ子。蝶川
 葉。覆さんがいと。正緒。社香炉に。名香くゆ也。
 又我が。あか。時。世よの古風か。は。江戸の
 子の肩をりもやう。一尺八寸のふを。袷に。むらさ
 うら故。陸分の伊達とせ。心故。今時。三尺
 ちうき。スあ。袷。いちを。あんのうらぬひのを。やる
 世界。とありか。のい。ゆるき。あ。き。
 何。き。あ。と。お。人。又。禁。經。氣。に。

しつしつと續子町盤昌仕出^たえ。拾分市上
位なるは。後せん審をてら。高のたれこるると。
太夫は買ふ心は。流てんれは。兼のさぬたき
ありび度と。都の歴々たれふり志のい集と兼
備子町も。早子野のやくに荒たてて。今うり
ハ九十手あめ奉なれは。時子けいん。よひあま
こらちるに。太夫の高料、びとひて。續子町通
といで。いまもむうもあま奉。所。唯評の
盤昌。ふせんぢやうと。くの才代もあめよきものと。あ

しきいよる奉とく。時子けいん。と自中にもあり。
金銀を。通。流山とさるて。されは。中。むうたり
あ。きと。み理れ。よの中。一統。奉。まに。ま
るゆに。有難子。時。子。け。い。ん。む。う。ふ。れ。何。と。魚。子
るひさめ。む。う。ふ。お。の。け。ら。賢。お。さ。る。奉。あ。ま。林。示
短。兼。に。存。紙。紙。補。ず。と。て。之。由。が。持。固。是。お。こ
お。甘。郎。の。中。に。念。ど。た。れ。る。お。首。使。い。し。子。の。海。法。と
お。ま。ま。太。夫。天。神。一。と。五。牧。十。牧。け。い。さ。る。に。か。こ
め。の。せん。と。在。ま。れ。と。六。奉。を。と。け。れ。は。け。い。す。が。い。下。あ

女郎に。お逢ひなすれぬ大信子母程有て。あの子は
尚存るん。かゝる女郎あり。又はげしき女郎ハ一日。
花紙五十枚でいたるる。太夫天神にあり
る。大信子の座をなす心かく教人のいふあり。
と有る時世智がくまき世をれども。つゝ免れぬ
女郎の紙のわづらひ。かゝるをのいふや。ま
二二ちよかきぬハ春まづこれあり。春あ教ま
真まめ。先草紙に。何うもをのまねごと
ふところ。紫の嬢のまねとある。又

かゝる。車ハ。新所には。まきとりありあり。
ま風さるをのさる。に。近き。この春はさる。
まの法郎。名信の大信子。時。名信の太夫。
弁春く先約をゆきて。身代をせぬ。程能
く。之。名信の大信子の揚紙を。まきあり
有。それ故先約の揚紙の件。飛ぶ女郎。たまの
遊り。揚紙の中。戸を。まきあり。
中。戸を。うら。まきあり。ゆき。す。すの法郎と
ハ。太夫の名。法郎。江。引。まき。の。名。せ。や。ぬ

かゝるハ久次とりの名をきく

久次いけりちいし流花江せエかアむうち

〜ヒイサアチイい、わア、〜イまア、ヒ

サア、ちイ、サア、ちい、ヒイ、けア、ちイ、せエ

はア、せエ、せエ、やア、まア、せエ、走ア、伊たア

いイせエまアせエやアまアせエいけ次

太夫の名故一編引りあの名故三編

かゝるの名故七編んよあるをきり

かゝるを。手。を。繰。る。ぶ。り。の。つ。け。し。き。ず。す。な

アさん

夜軍の繪と劇をやう

武者物語と池田彦彦のうらとく

夜軍

夜の繪を携にまゝひて南をき

いまと里宴といひり侍りお

一劇

門指や塚のうらな歌を現る

よこを高くひらくを流〜

一之卅八終

一之卅八終

一之卅八終

一之卅八終

一之卅八終

一之卅八終

一之卅八終

一之卅八終

一之卅八終

